

様式 7 (Form 7)

学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

Preserving Tradition in Craft Design Development
(Case Studies: Yamanaka Lacquerware, Japan and Tasikmalaya Bamboo Weaving,
Indonesia)

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

工芸デザインの発展における伝統の保存
(日本の山中漆器とインドネシアのタシクマラヤの竹細工)

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) Meirina Triharini

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 鏡味 治也

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

メイリナ トゥリハリニ

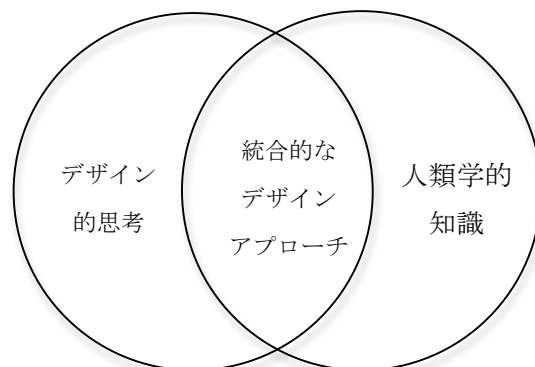
工芸デザインの発展における伝統の保存
(日本の山中漆器とインドネシアのタシクマラヤの竹細工)

インドネシアの伝統工芸は文化的財産の生産に貢献してきた文化活動である。伝統工芸品には少なくとも 3 つの不可欠な要素が認められる一目的、価値、そして技術である。伝統工芸の意義は実際的な使用にとどまらず、工芸が生みだした土着文化の伝統知識の再生産へと広がりをもつ。インドネシアにおいて、政府は例えば小規模産業の活性化を通じて、食材や伝統薬とともに伝統工芸を経済的商品として促進しようと試みてきた。学術機関は工芸デザインや該当産業のマネジメントの向上方法を調査してきた。さらに、学術研究は伝統工芸のデザイン再考手順を提供することによって (Nugraha, 2010)、また、工芸の発達に向けた異なるアプローチを模索することによって (Triharini 2011; Zulaikha, 2012)、伝統工芸の担い手を力づけようと試みてきた。私の研究の目的は、インドネシアの伝統工芸のデザインの発達と保存に関わる。この研究が、伝統工芸の新しいデザインを開発しているデザイナーと、文化的実在としての伝統工芸の保存に取り組む NGO の政策担当者に向けて、考慮すべき事柄を提示することが期待される。

研究において、日本とインドネシアで事例研究を行った。日本の事例は山中漆器である一方、インドネシアの事例はタシクマラヤの竹細工である。各事例は歴史、工芸品の描写、フィールドワークでの調査結果をもとに提示し、その文化的側面を分析する。

フィールドワークから、日本とインドネシアの伝統工芸のあいだに共通点と相違点が浮かび上がった。共通点は、工芸品の主な機能、職人の製作動機、素材に関する知識、そして自然への親しみである。相違点は、製作過程の本質的特徴、工芸品の主要機能の発達過程、そして政策に関連した工芸活動の現在状況である。これらの結果から、歴史的背景、職人のふるまいといった、日本とインドネシアの伝統工芸活動に影響を与える重要なファクターを結論付けることができる。

研究結果を考慮し、インドネシアの伝統工芸、とりわけタシクマラヤの竹細工の保存・発達のための方策を提案する。方策には、人類学的な知識を用いたデザインの発達が含まれる。



Dissertation Abstract

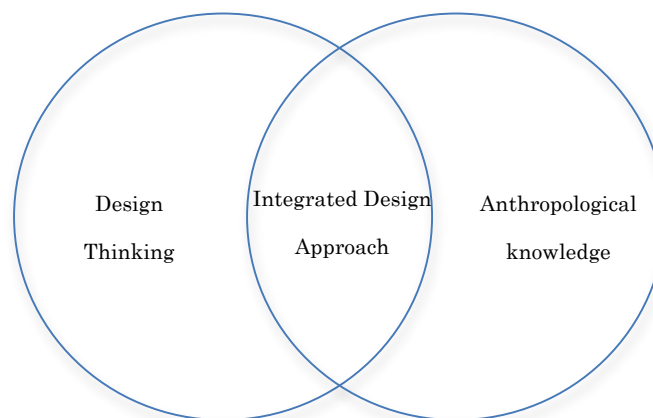
Traditional craft in Indonesia is a cultural activity that contributed to the production of cultural treasures. There are at least three very essential points in a traditional craft: purposes, values, and skill. Significance of traditional craft is not limited to practical functions, but also spread to reproduce the traditional knowledge of indigenous cultures which craft itself had created. In Indonesia, the government, for example, has attempted to promote traditional crafts as an economic commodity through the empowerment of small-scale industry, along with other commodities, such as food and traditional medicine. Academic institutions have been researching the methods of improving the design of crafts and management of their industries. Moreover, much academic research has attempted to empower the makers of traditional crafts, partly by providing a proper process for redesigning traditional crafts (Nugraha, 2010), and also by trying out different approaches to develop the crafts (Triharini 2011; Zulaikha, 2012). The objectives of this research are related to the development of the design of traditional craft and its preservation in Indonesia. It is expected that this research can provide consideration for designers who work on developing new designs for traditional crafts and for policy makers or NGOs who work on the efforts of preserving traditional craft as a cultural entity.

The research took case studies from Japan and Indonesia. A case study from Japan is about traditional Yamanaka lacquerware; on the other hand, a case study from Indonesia is on the bamboo weaving crafts from Tasikmalaya. Each case is presented regarding its history, a description of the crafts, and findings from fieldwork. The findings are analysed from cultural aspects.

The findings from the fieldwork show that there are similarities and differences between

the traditional craft in Japan and Indonesia. The similarities are the main function of the crafts, the motivation of the craftsperson, the knowledge about materials, and the closeness to nature. Meanwhile the differences are the nature of the craft-making characteristic, the development of the main function of the crafts, and the current situation of crafts activity related to the treatment from the government. From those findings, we can conclude that there are important factors that influence the activity of the traditional crafts in Japan and Indonesia, such as the historical background, and the behavior or attitude of the craftsperson.

By considering the research results, I suggest a strategy to develop and preserve the traditional craft in Indonesia, especially the case of study of bamboo weaving craft in Tasikmalaya. The strategy includes the anthropologically informed design development which is represented as the chart below:



学位論文審査報告書

平成27年 2月 3日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学

氏名 メイリナ・トリハリニ

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

Preserving Tradition in Craft Design Development

(Case Studies: Yamanaka Lacquerware, Japan and Tasikmalaya Bamboo Weaving, Indonesia)

「工芸デザインの発展における伝統の保存（日本の山中漆器とインドネシアのタシクマ
ラヤの竹細工）」

3 審査結果

判定（いずれかに○印） ☒合格 ・ ☐不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（☒社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 鏡味治也 ☒

委員 西本陽一

委員 中島弘二

委員 轟 亮

委員 矢口直道

委員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は、産業製品に押されて衰退しつつあるインドネシアの伝統工芸の文化的価値を見定め、その技術を維持継承していくにはどうしたらよいかという問題意識から、比較対象事例として日本の山中漆器とインドネシア・西ジャワの竹細工をとりあげ、双方の地場産業としての歴史的経緯や生産工程、製作者の技術修得過程や製作意識を現地調査から描き出して比較し、その共通点と相違点からインドネシア伝統工芸の継承策のヒントを探ろうとしたものである。本論文提出者はインドネシアの母校でプロダクト・デザインの修士号を得ており、これまで工芸製作者への助言や共同制作等の実践活動も行ってきた。今後も大学で教鞭をとるとともに母国の工芸家たちを支援する社会貢献活動に積極的に関わっていく意向である。そのため本論文最終章でインドネシア伝統工芸維持継承のための提言を提示しているが、政策的・実践的意味での有効性や実現可能性については論文評価のポイントとしなかったことを付記しておく。

本論文は1章でまず上記の問題提起のあと、イギリスの工芸研究者グリーンハルフの議論を紹介して「工芸」の特質を検討している。それによると craft という語は遅くとも18世紀イギリスでは人間のあらゆる製作活動を指すのに使われていたが、産業革命の進展の過程で生じた19世紀末の Arts and Crafts 運動のなかで「装飾芸術」「日常性」「労働の政治性」という3つの要素を内包するようになる。このうち「日常性」は工芸がコミュニティで集合的に作られ使われるものであることから文化的生産物の特質をもつということであり、「労働の政治性」は工芸品製作が製作者の生計を左右することを指している。しかし20世紀に入るとそこから文化的要素が脱落し代わってデザインがそこに加わり、工芸は芸術・工芸・デザインの3者の組み合わせで展開していくことになった。この概念設定が論文の考察部分の枠組みとなっている。

2章は日本の山中漆器を紹介した部分である。まず日本のデザインの特徴のひとつとして、その単純で自然で静謐で素朴な点を挙げ、それを良しとする価値観のルーツを茶道の成立に求める。それまでの美の価値は中国由来の豪華で華美なものに置かれていたが、侘びやさびを提唱する茶道がそれに対抗する単純で素朴なもののもつ美的価値を強調した。茶道は支配階級である武士の間でまず広まった、その意味で高級な文化活動だったが、明治になるとより民衆性を強調した民芸運動がふたたび自然で素朴な工芸品の価値を強調するようになる。こうして日本では工芸といっても、民衆的な素朴さを強調する「民芸」やその第二次大戦後の復興運動である「新民芸」から、高度な技法を誇示する「伝統工芸」や「美術工芸」まで、いくつかの区分が存在することになった。こうした歴史概観のあと、2章では山中漆器の歴史と生産工程を紹介

した上で、5人の製作者（木地師）への聞き取りからその製作者意識や理念、目標などを探っている。そして章の末尾で山中漆器製品を伝統技法で作られた日用品、高度な技術で作られた美術工芸品、モダンなデザインを伝統技術でかたちにしたもの、プラスチックを成型した大量生産品の4つに分類している。

3章ではインドネシアのジャワ島西部のスンダ人の村人の間で製作されてきた竹細工を論じる。まずインドネシアの伝統工芸に宮廷の中で発達した *kriya* と呼ばれる工芸と、民衆の間で作られてきた *kerajinan* と呼ばれるものがあり、前者はその高貴さや希少性からその美術的価値が認められ技術も継承されているが、一般人の日用品が主体の後者は産業製品との競争にさらされ、産業省の支援でデザイナーとの共同制作など模索されながらも苦戦している。そのあと3章は西ジャワのスンダ文化を概説して竹との親密さを紹介し、竹細工を重要な生業としてきた村をとりあげて製作過程や技法を示したあと、高い技術をもつ2人の職人への聞き取りからその技術修得の経緯や製作活動での理念や目標について論じている。

4章では以上2つの事例から、日本とインドネシアの工芸の特質を整理し確認して、1章で摘出した工芸の3要素という観点から検討している。そして双方の製作者の共通点として、あくまでも日常生活で使われる用具の生産を目指すものであること、よりよいものを作ろうとする意欲、素材に関する高度な知識、自然に深く親しむ生活様態を指摘する。他方相違点として、山中では木地師ごとに独立した工房をかまえて製作するのに対し、西ジャワの村では技法も作業も非常にオープンに行われること、日本では人間国宝や日展、伝統産業認定などが技術の進展や産業継続を後押ししているのに、インドネシア政府は産業として成り立つようにという方向でのみ支援するため、工芸品は安価で粗雑な大量生産可能なものとして、もしくはみやげ物としてしか生き残れないことがあげられる。そしてその現状の違いを生み出した要因として、両者の歴史的経緯と人間性や気質の違いを指摘している。

続く5章では、インドネシア工芸の維持継承のために、単に新規なデザインや技法の開発の模索だけでなく、それがひとつの地域で営まれてきた理由と様態を理解し、文化的資源としての意義を認めて継承していく道を探る必要性和そのための策を提言している。

議論のための枠組みや素材は十分に提示されているものの、精密な分析がやや不十分で、議論や結論が単純化されすぎているのが惜しまれるが、日本とインドネシアでそれぞれしっかりした現地調査を行い、双方の特質を具体的に提示して妥当な結論を引き出しており、博士論文の水準を満たすものと、審査員一同判断した。